

# チベット仏教における霊塔の形成と発展の研究<sup>1)</sup>

当 智

## Study on the Formation and Development of Tibetan Buddhist Spirituality

DANG Zhi

### Abstract:

Spirit pagodas represent the special Tibetan way of burial, and most temples have spirit pagodas of varying sizes and designs. The stupa is an important part of the Tibetan stupa, a building with the dual function of stupa and pagoda burial, unique to Tibetan Buddhism.

Keywords: Tibetan Buddhism, spiritual tower, formation, development

キーワード：チベット仏教、霊塔、形成、発展

### はじめに

霊塔はチベット語でクドンチョルテン (sku gdung mchod rten) であり、中国語では「灵塔」という。チベット語『dung dkar tshig mdzod chen mo』において、仏塔について説明する時、仏塔と霊塔の違いを以下のように定義した。

現如今，連佛塔和靈塔之區別都不懂的人很多，總的來說佛塔基於是否裏面存放了屍骨或骨灰而分為兩類，其中存放了屍骨或骨灰的稱之為靈塔，如此可以變得通俗易懂。是佛塔不一定是靈塔，但靈塔一定是佛塔的一個種類。<sup>2)</sup>

これによれば、現在、仏塔と霊塔の違いも知らない人が多い。総じて言えば、仏塔は死体や遺灰が保

---

1) 本研究は2021年12月、甘肅政法大学の校級重点項目「日本のチベット学研究：歴史と現状」(項目番号：GZF2021XZD04) における一部の研究成果である。

2) トンカル・ロザンチンリ (2009: 868) 本文に引用するチベット語の文献は、筆者が訳した。

管されているかどうかによって2種類に分けられる。分かりやすくいうと塔の中で死体や遺灰が保管されているものを霊塔と呼び、仏塔は必ずしも霊塔とは限らないが、霊塔は仏塔の一種に違いない。

チベット仏教に関する霊塔は特別な埋葬方法を体現するもので、ほとんどの寺院には大小さまざまな精霊塔がある。洛罗桑伦巴(1987)『第三眼』においては、仏舍利塔はチベット仏塔の重要な一部であり、仏舍利と塔葬という二重の性質を持つチベット仏教独特の建物である<sup>3)</sup>と述べている。

本論では、まず、チベット仏教の霊塔に関する先行研究を整理する。続いて、インドのストゥーパとチベット原始土葬を比較し、チベット仏教的な霊塔機変と形成、発展を分析する。最後にこれまでの先行研究の成果を用いてチベット仏教の霊塔を分類したい。

## 一. チベット霊塔に関する研究

これまでおこなわれてきたチベット仏教の霊塔に関する研究は、数多くの分野にわたる。これらの学術研究成果の多様性は以下のように要約できると思われる。

### 1. 仏教文化の観点からの研究

仏塔建築はインドから発祥し、仏教がチベットに伝わり、異なる地域、異なる民族の文化と統合した後、スタイルが大きく変化し、民族的な特色のある仏塔が形成され、仏教芸術史で多彩な姿を見せている。中国は仏塔に対する研究成果が多いが、チベット仏教に関する霊塔の研究は少ない。数少ない例を挙げれば、張馥寰(2006)は、各地域の重要仏塔の紹介を通じて、現場調査成果を結合しており、仏塔の発展史と関連理論を整理し、中国の仏塔研究に大量の一次史料を分析しており、その中でチベットのチホルテンにもいくつか分析を加えている。羅哲文(1985)の『中国古塔』においては、各時期の仏塔の姿を示すことにより、中国古代から始まり、塔の起源と発展状況を体系的に整理している。

その他、全仏編集部が主編した『佛教小百科』にも仏塔に関する内容があり、桑子長が編纂した(2001)『中国名塔』など多くの専門書があるが、チベット仏教の仏塔分野の著作は多くない。ただ、ソナム・ツェラン(2002)『中国佛塔』においては、チベット仏教のチホルテンに関する言及の中で、チベット仏教のチホルテンの起源、歴史、様式、構造、特徴などについて全面的に分析を行っている。また、コンチョク・テンゼンとチンリ・ジャツォ(2007)の蔵漢対照『藏式佛塔』があり、この本は図と文章に豊富な知識を備え、観賞性にも富むチベット式に関するチホルテンの専門書である。その中でチベット仏教に対する仏塔の進化の過程、発展の歴史、理論的根拠、造形についてなどを論述しており、大量の画像資料を用い、チホルテンの研究に貴重な資料を提供されている。

チベット霊塔に関する論文は、「夏格旺堆(2008:1-322)及び、索南才让(2003:82-88)や欧信福(1993:70-83)、刘畅(2012)」<sup>4)</sup>などがある。

3) 洛罗桑伦巴(1987)を参照。

4) 彼らの研究論文はそれぞれ「西藏古代建筑佛塔历史沿革的初步研究」「论西藏佛塔的起源及其结构和类型」「西藏佛塔及其建筑艺术」「西藏佛塔研究」であり、チベット仏教の佛塔及び、霊塔に分析している。

## 2. 葬儀文化の観点から研究

霊塔は一般的に高僧大徳の死体を保管する仏塔を指す。霊塔は宗教的な象徴を持つ仏塔であり、特別な葬儀方式でもあるので、チベット人の葬儀文化を研究する学者は文化習慣の観点からチベット仏教の霊塔を研究している。例えば、馮智の『雪域喪葬面面觀』<sup>5)</sup>はチベット人の葬儀の風習を体系的に研究する著作である。その中で塔葬という特殊文化現象として論述し、仏塔はチベット地の形成と発展の歴史を簡単に紹介しており、さらに、チベット地域の主要霊塔の分布状況を踏まえて分析を行っている。

また、霍巍の『西藏古代墓葬制度史』<sup>6)</sup>では、考古学の理論と方法を主とし、近年の考古学資料と各種文献資料を踏まえて分析を行っており、チベット古代における墓制度の起源、発展、変化などの問題を研究する専門書である。ほかにもチベットで流行されるいくつかの喪俗を全面的に分析しており、その中で塔葬に関する内容もあり、考古学的論拠を通じて肉身霊塔の原型は吐蕃時代の「塔型墓」であること、チベットの霊塔遺跡状況と霊塔が担う宗教的意義を整理している。

索南才让（2003：20-23）「藏民族的灵魂观与藏传佛教肉身灵塔」において、チベットの葬送文化に暗黙のうちに存在する魂の概念を通して、肉体を持つ霊塔の形成の思想的特徴と意義を検討している。夏吾卡先（2021：141-145）も「吐蕃塔形墓的起源与原始塔葬」では、塔型墓遺跡の考古資料分析を通じて、その出現時間を二つ段階に分けて、塔形墓を形成する文化的要因を分析している。更に葬儀の風習の視点で霊塔を分析し、霊塔がチベットで発展する觀念意識と理論的柱を踏まえ、チベット仏教霊塔を全面的に理解するための多視点を提供している。

## 3. 霊塔を事例とした研究

霊塔の研究成果は、主に歴代のダライ・ラマと班禪大師の霊塔の研究に集中している。例えば「平措次旦（1985）、陳光榮（2003）、劉水玉（1994：24-26）、陳慶英（1989）」<sup>7)</sup>、旺堆（1990）、洛桑群覚と陳波（1997：67-68）などの論文は主に歴史と文献学の観点から、ダライ・ラマ、班禪の霊塔を記述しており、ゲルク派の発展時代の霊塔の特徴を知るための重要な参考資料を提供している。

他にも、海外のチベット学は中国より早く、チベットに関連した研究分野が比較的多いが、チベット仏教の霊塔に対する体系的な研究は少ない。霊塔に関する先行研究の内容は一部の探検家、旅行者の旅行記や報告書に散見され、彼らは自分の見聞を通じて、霊塔の建立及び民間或いは寺院で死体を処理する方法を描写している。例えば、チャールズ・ビルの『西藏人民的生活』<sup>8)</sup>や日本の学者河口慧海の『チベット旅行記』<sup>9)</sup>もある。また、海外に在住の僧侶洛羅桑倫巴の『第三眼』でもチベット霊塔の肉体制に参加する過程を描写しており、霊塔の建造や肉体処理に参加した僧侶への聞き取り調査の記録も記述さ

5) 馮智（1988）を参照。

6) 霍巍（1995）を参照。

7) 霊塔を事例とした論文はそれぞれ「布达拉宮内的五世达赖灵塔」「四至九世班禅大师以及他们的灵塔」「四至九世班禅大师以及他们的灵塔」「十世班禅灵塔祀殿建造始末」である。

8) 霍巍（1989：88-89）の中で解釈している。

9) 河口慧海（1904）（下巻）第八十七章を参照。

れている。<sup>10)</sup>

これらの旅行記と論著は肉体霊塔に関する内容を散発的に記録しているだけであるが、チベット仏教における霊塔に研究を進むために、参考価値は当然あると考える。

## 二. チベット仏教の霊塔の起源

霊塔も仏塔と同様にインドで生まれたのもで、梵語では「stupa」と訳され、先行研究によると、その本来の意味は遺骸を埋葬する墓であることがわかっている。現在、霊塔は名前の通り仏教塔の意味であり、その形成は仏教の誕生と密接に関連しているが、仏教の創始ではなく、インドの葬儀文化の借入と発展の結果である。例えば、ダワラツォは次のように述べている。

由於《吠陀經》中出現了「窣堵波」這一名詞，所以許多專家學者判斷這是古代印度吠陀時期就已經存在的，是專為王公貴族建造的類似陵墓的建築，之後逐漸被佛教吸收借鑒，成為自身文化的重要內容。<sup>11)</sup>

これによれば、『吠陀經』に「窣堵波」という名詞が現れたので、多くの専門家と学者は古代インドヴェーダ時代にすでに存在し、王公貴族のために建てられた陵墓のような建物だと判断し、その後徐々に仏教に吸収され、自分の文化の重要な内容になったという。また、『佛説八大霊塔名号経』<sup>12)</sup>にも八大霊塔について記載されている。仏陀涅槃後、信者たちは仏舍利を中心的な意味とする窣堵波を広く建立され、7世紀頃に仏教とともにチベットに伝わった。デセ・サンジェジャツォ（第司・桑吉嘉措 1990: 365）『南瞻部洲唯一庄严目录』（霊塔志ともいう、ダライ・ラマ五世の霊塔志である）にも霊塔に関して以下のように記載がある。

這些舍利被分為八份，並依次建塔，稱為「舍利八塔」，佛陀荼毗後除了形成的舍利外還遺留下未被徹底燒毀的遺骨，人們將這些聖物平均分為八份，並建塔供奉，這些塔被稱為「肉身八大靈塔」佛陀剛進入涅槃後，在保存法體時以五百斤絲綢將其身緊緊包裹，上下各有五百法衣作為裝飾，再以薪火進行處理，剩下的一些沒有燃盡的綢布和內外法衣的殘余布料，以及各種物質完全燃燒後留下的灰燼等都被認為具有神聖性，因此分別建塔供奉，這些靈塔被稱為特殊靈塔。<sup>13)</sup>

この分類は塔瓶に保存された聖物の種類に従って決定されているが、社会の発展に伴い、チベットの

10) 罗桑（1980）を参照。

11) 达瓦拉措（2020: 47）の博士論文であり、ダライ・ラマ五世の霊塔『五世达赖喇嘛灵塔研究』である。

12) 『佛説八大霊塔名号経』の原文は『大正新脩大蔵経』（大蔵出版株式会社、1925年、第32冊、経号 1685）に拠る。仏陀の誕生から涅槃までの8つの出来事が記録されている。蓮聚塔、菩提塔、吉祥門塔、神変塔、天降塔、息争塔、尊勝塔、涅槃塔である。

13) 第司・桑吉嘉措は直接ダライ・ラマ五世の霊塔を建立するために書いた著作であり、別名は霊塔志ともいう。

民衆社会の中でも塔という仏教建築に慣習的な分類がなされる。チベット仏教の霊塔の起源は、原始の土葬から発展して来たのか、インドストゥーパの影響を受けているのかについては不明な点が多い。しかし、チベット仏教における仏塔はダライ・ラマ五世（2002：1、12）の《西藏王臣記》によると次のような記載がある。

在贊普拉脫脫日年贊在位時，有一次，忽從天空降下《諸菩薩名稱經》、黃金寶塔、《寶篋經》、心要六字大明咒、旃陀羅嘛呢印模等，落於雍布拉康頂樓之上紀念佛陀一生中最重要的八大功績而修建了「善事八塔」佛陀涅槃後將法身火化，他的遺骨化成了光瑩堅固的。

ラトトリ・ニェンツェンが在位した時、ある時、突然空から『諸菩薩名稱經』、黄金宝塔、『宝篋經』、心要六字大明呪、旃陀羅嘛呢印模などが降り、雍布拉康の頂上に落ちたという。この記録は、この時期に仏塔がチベット地域に伝わったことを示しているが、それは霊塔であるかはまだ不明である。

また、『sba bzhed』（巴协）において、以下のように記載される。

西元八世紀下半葉，以印度歐丹達菩提寺為藍本，按佛教曼荼羅的形制建造了桑耶寺，其主殿四方建有紅、綠、黑、白四座佛塔。<sup>14)</sup>

8世紀後半、インドの“欧丹達菩提寺”をモデルにして、仏教曼荼羅の形制でサムイェー寺が建てられ、その主殿の四方に赤、緑、黒、白の4つの仏塔が建立された。また、文献によると、「当時インドから来た「zhi ba mtsho」<sup>15)</sup>が亡くなった後、哈布山<sup>16)</sup>に埋葬しており、仏塔を建立された」<sup>17)</sup>とあり、これは吐蕃時代に死者のために仏塔を建てる先駆けと考えられる。しかし、これらは霊塔と違い、本当の意味での霊塔ではないと考える。なぜなら、これら仏塔は賢者を記念するために建てられた記念碑式建物に属しているのである。では、霊塔と肉体制度はチベット地域において何時から始まり、どのような思想意識の影響で生まれたのかを検討していきたい。ソンツェン・ガムポ以前には、霊塔関する体系的な文献の記録がない。更に考古学の調査及び発掘においても成果は殆どない。

ダジェンワンブン（丹珠昂奔）の著作の中で、「現在の西藏林芝地域で新石器時代の古代人類の遺骸と墓を発見した考古資料の分析を通じて、土葬は少なくとも四五千年前に始まった」<sup>18)</sup>と述べている。また

14) バセルナン（2009：37）『sba bzhed』（巴协）は中国語で“巴协”と訳されており、8世紀のチベット古代史を研究する重要な著作である。特にサムイェー寺の建設過程と落成の場面を記述し、仏塔がインドから伝わったばかりの姿及び、その後の変化と発展を理解する上で根拠となる文献である。

15) 「zhi ba mtsho」とはチベット語でシワツォであり、中国語名は寂護または名静命という。詳細は、Dung dkar（2009年）を参照。

16) 哈布山はサムイェー寺の東側にあり、高さ60メートルぐらいある。チベットの四大神山の一つと呼ばれている。史書によると、赤松德贊と蓮花生がこの山に来て建寺の地形を調査し、興仏藍図を計画したと考えられる。哈布山東側には、吐蕃時代の三大訳師の霊塔と名僧寂護の霊塔があると言われる。

17) 韦色朗（2010：133）を参照。

18) 丹珠昂奔（2013：185）を参照。

霍巍もチベットにおける塔葬に関して次のように述べている。

原始塔葬出現的年代約開始於西元8世紀後半至9世紀上半葉這一歷史時期內。<sup>19)</sup>

チベットの原始塔葬が出現した年代は8世紀後半から9世紀前半までのこの歴史的時期に始まったと考えられる。

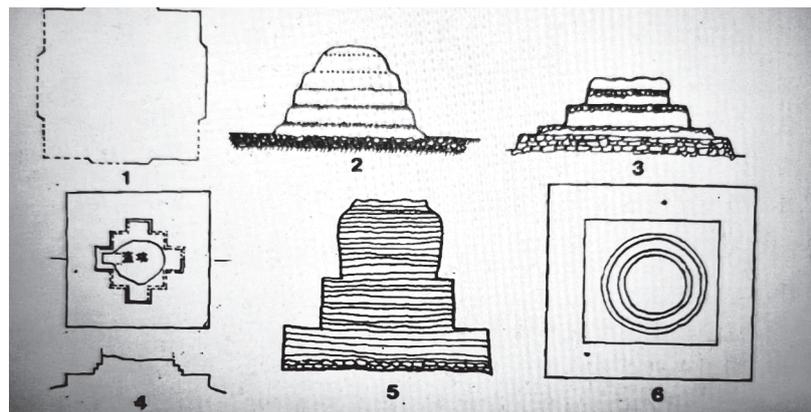


図1 吐蕃時代の墓葬中の塔型墓丘<sup>20)</sup>

チベット仏教の霊塔はチベット地域で一定の文化要素を形成し、初期のチベット人の伝統的な墓文化と肉体を重視する思想観念と一定の関係があると考えられる。僧人である dkon mchog bstan'dzhin (根秋登子) 氏は次のように述べている。

近年來隨著考古挖掘的不斷發現，證實肉身靈塔的最初形制出現在吐蕃時期，雖然這一時期的肉身靈塔實物極少，但從一些墓葬的考古中發現了一種外形與佛塔極為相似的墓丘，有的學者認為這種塔型墓不僅與佛教的影響有關，根據早期一些岩畫內容和苯教的儀軌推斷，它的形成與苯教不無關係，特別是苯教早期為供奉眾神而建造的土塔，無論從功能意義和外形特點都與現今的藏傳佛教佛塔相似。<sup>21)</sup>

考古学の発掘及び発見に伴い、肉身靈塔の最初の形が吐蕃時代に現れたことが確認されていた。この時期の肉身靈塔について、実物は極めて少ないが、一部の墓の考古学から仏塔と非常に似ている墓丘が発見され、この塔型墓は仏教の影響と関係があるだけでなく、初期の岩画の内容とボン教の儀軌から推

19) 霍 (1995 : 322) を参照。

20) 霍 (1995 : 172) を参照。

21) 根秋登子 (2007 : 38) を参照。

測すると、その形成はボン教と無関係ではない。特にボン教の初期に神々を祀るために建てられた土塔は、機能的な意味と外形の特徴から現在のチベット仏教仏塔と似ている。

その前にストゥーパは千年以上の発展過程を経て、一定の規模と相対規範の形を形成したが、チベット社会に浸透するにしたがって、仏教の重要な宣伝キャリアであるストゥーパ文化の違いによって、インドストゥーパがチベットに伝わり、ボン教との衝突と交渉が絶えなかった。そのため、チベット仏教における霊塔はインドストゥーパの影響が深いと考える。

### 三. チベットの霊塔（skug dung）の形成と発展

チベット仏教の霊塔は仏教文化における意味している象徴の一つであり、チベット仏教の形成に伴い、仏塔はチベットの伝播に新たな発展と変化があった。霊塔はインド仏教、中国仏教、チベット仏教で呼称が異なり、その呼称はそれぞれの言語文字体系、地域方言呼称、伝統的な文化習慣の影響で形成されたため、仏塔の分類基準が曖昧で多様化するという特徴がある。

#### 1. クドンチョルテンの産生

霊塔はチベット地域に一定の文化要素を形成し、初期のチベット人の伝統的な墓葬文化と肉体を重視する思想観念と一定の関係がある。

自朗達瑪滅佛後、從吐蕃逃出的三位僧人瑪・釋迎牟尼、藏・饒賽和姚・格郡到了今天的青海省平安縣一帶，前兩人在瑪爾藏挖洞修行，後者在一山溝修行。此後三人來到今天的西寧，後來即圓寂於此。後來人們為他們建立了靈塔，再後來在此建成了西寧大佛寺。估計當時應在九世紀末十世紀初。這雖不在西藏本土，但可以看出為高僧建靈塔在這時就開始了。<sup>22)</sup>

ロンダマが仏を滅ぼした後、吐蕃から脱出した3人の僧侶のマル・シャクチャムネ、ツァン・ラブセとヨ・ゲジョンが現在の青海省平安県一帶に到着し、前の二人はマルツァン寺の岩窟で修行し、一人は別の山洞で修行した。その後、3人は今日の西寧に来て、示寂した考えられる。後に人々は彼らを記念するために霊塔を建造し、西寧大仏寺も建立したとされる。当時は9世紀末の10世紀初頭だったと推定される。現在よるとこれはチベット自治区の本土ではないが、高僧のために霊塔を建てるのがこの時から始まったことがわかる。

8世紀中から9世紀末の建造された霊塔について、以下のように表にまとめた。<sup>23)</sup>

22) 洛桑（1997：67-68）頁を参照。

23) 洛桑、根秋（1997：2007）に基づき、筆者が作成。

表1

重要な人物	チベット語名	中国語名	建造年代	建造の地区	材質
シワツォ	མཁའ་ཚེན་ཞི་བ་འཛོལ།	寂护	8世紀中	西藏山南桑耶哈布山	石、土
カワ・ペツク	ལྷ་མ་བ་དབུ་བརྟེན་གས།	噶瓦呗泽	8世紀中	西藏山南桑耶哈布山北側	石土夯築
チヨロ・ルジェツェン	ཚོག་རྩ་ལྷ་རྒྱལ་མཚན།	焦若・鲁坚赞（焦訳師）	8世紀中	西藏山南桑耶哈布山北側	石土夯築
シャン・イエシデ	ཞང་ཡེ་ཤེས་གྲེ།	香・也协德（香訳師）	8世紀中	西藏山南桑耶哈布山東側	石土夯築
マル・シャクチャムネ	དམར་ཤུག་ལྷ་བླ།	玛・释迦牟尼	9世紀末	青海省西寧	石土夯築
ツァン・ラブセ	གཙང་རབ་གསལ།	藏・饶塞	9世紀末	青海省西寧	石土夯築
ヨ・ゲジョン	གཡོ་དགེ་བའི་འབྲུང་གནས།	姚・格郡	9世紀末	青海省西寧	石土夯築

十一世紀前半になると、チベット仏教また、中央アジアのイスラム教と仏教は今日新疆の于聞で決戦を行われ、仏教を信じている于聞国は24年間包囲された。この間、西チベットのンガリ王イエヒヴォは王位を放棄され、軍隊を率いて于聞を援助した。戦争に敗れてイスラムの教徒に捕らえられ、ンガリ王が殺された。彼の霊塔に関しては、「西藏的灵塔与金顶—兼论后宏期西藏的黄金及黄金制品」によると、以下のように述べている。

11世紀初、西藏阿裏古格王朝意希沃の遺體被保存在今吉隆縣仲嘎地方的一座靈塔中。可見，當時靈塔葬已初具葬法禮儀，這為後來藏傳佛教、尤其是格魯派靈塔葬的規範化和制度化奠定了基礎。<sup>24)</sup>

11世紀初頭、チベットのンガリクグ王朝のイエヒヴォの遺体は現在の吉隆県仲嘎地方の霊塔に保存された。当時、霊塔葬は葬法儀礼が初めて行われた。これは後にチベット仏教、特にゲルク派霊塔葬の規範化と制度化の基礎を築いた。

## 2. クドンチョルテン発展

11世紀初からツォンカパまでの数百年間、霊塔の建立は数え切れないが、その中で影響が大きいのは次の例である。

竹巴噶舉的祖師之一藏巴嘉熱・益喜多吉於金羊年年去世，遺體火葬之日，空中現虹幕，天雨瑞花，其節脊椎骨上皆現出一尊觀音像，全部被安放於其靈塔之中。<sup>25)</sup>

デュパ・カギユの祖師の一人であるイエシドルジェは1211年に亡くなり、遺体が火葬された日に、空に虹が現れたと思われる。その上、空に観音像が現れ、すべてその霊塔の中に安置されたと考えられる。また、資料によると、11世紀初から13世紀末までの建造された有名な霊塔は次のようである。

24) 索（2003：21）を参照。

25) 洛桑（1997：68）を参照。

表 2

重要な人物	チベット語名	中国語名	建造年代	建造の地区	材質
イエヒヴォ	ཡེ་ཤེས་འོད།	阿里王益西沃	11世紀初	西藏吉隆仲噶	石土塔
アティシヤ	ཨ་ཏི་ཤེ།	阿底峡	11世紀中	西藏曲水聂塘	石土塔
ナロパ	ན་རོ་པ།	那若巴	11世紀	西藏曲水聂塘寺	銅塔
リンル・ドルジェジャツエン	ལིང་ལུ་རྡོ་རྗེ་ཇམ་ཙེན།	林热白玛多吉	12世紀末	那浦寺	尸骨塔
サベン・クンガジャツエン	ས་པན་ལུན་དགའ་རྒྱལ་མཚན།	萨班・贡嘎坚参	13世紀中	甘肃武威市幻化寺	石土夯築

13世紀になると、チベット仏教的な霊塔は数多く建立されたと考える。例えば、陈光荣氏は<sup>26)</sup>、チベット寺院に保存されている霊塔及び、歴代のダライ・ラマとパンチェンの霊塔について述べている。1世から4世までダライ・ラマの霊塔は哲蚌寺とタシルンブ寺に建てられ、5世、7世から13世までダライ・ラマの霊塔はポタラ宮内に建てられた。その中で、五世ダライ・ラマと十三世ダライ・ラマの霊塔は最も雄大で荘厳である。陈庆英は<sup>27)</sup>、タシルンポ寺院に保存されているパンチェン歴代の霊塔及び、それらの価値を分析している。

チベット仏教における霊塔は、仏教の高僧、活仏の遺体を保存するための仏塔のことであり霊塔という独特な葬儀形式は、チベットで最も有名なのは歴代ダライ・ラマと班禅の金霊塔である。

#### 四. クドンチョルテンの分類

トンカル・ロザンチンリ (2009) が言及したように、仏塔と霊塔の違いは、主に人の体骨や遺体の遺灰などを塔の中に埋めているかどうかを基準にしている。仏塔は必ずしも霊塔ではないが、霊塔は仏塔の一種である。筆者も以前チベット仏教の霊塔について解釈しているが、文献不足ため深くまで分析できなかった<sup>28)</sup>。そのため、これによりはチベット仏教の霊塔の分類を検討すべきであると考え。チベット仏教の霊塔は一般的で2種類に分けられており、マルドン (dmar gdung) とカルドン (dkar gdung) である。

##### 1. マルドン

マルドンは高僧の死体肉体霊塔である。このような霊塔はチベット語で「マルドンであり、中国語で「肉身霊塔」と言われる。死体を処理する時、肉体は霊塔とほぼ同じ意味なので、チベット仏教の霊塔は肉体霊塔を指している。肉体霊塔はインド塔文化とチベット人の葬儀風習が融合して形成された独特な文化現象であると考え。

肉体霊塔は、死者の遺体を保存するという観点から見ると、その特徴は火葬、水葬、天葬などの葬俗の目的とは異なる。チベット人の葬儀文化の発展段階を見ると、死体の一部或いは全体を保存できる葬俗は土葬と石棺葬の2種類である。近年、考古学の成果によって、チベット各地で発掘された石棺葬と

26) 陈光荣 (2003 : 41-44) を参照。

27) 陳 (1989 : 88-96) を参照。

28) 当智 (2020 : 171) を参照。

初期の墓について分析がされ、チベット社会には土葬と石棺葬の墓形があったと考えられる。この葬俗は歴史的に長い年月の発展過程を経験したとされる。

## 2. カルドン

カルドンとは高僧の遺骨或いは骨灰を内蔵した塔であり、舍利霊塔とも呼ばれ、チベット語カルドン(dkar gdung)である<sup>29)</sup>。中国語で「舍利霊塔」及び「遺骨塔」という名称もある。カルドンも名前の通り、塔瓶の中で高僧舍利或いは歯と爪、髪等を供養する仏塔である。この形式の霊塔はインド仏教文化における標誌性建設ストゥーパがチベットの延長であると考えられる。

つまり、チベット仏教の霊塔におけるマルドンとカルドンは宗教崇拜と葬儀機能の二重属性を持っている。それは仏塔の一部であり、仏塔の宗教機能意義を持ち、同時にチベット人の伝統的な葬儀習慣の表現方式でもある。特にチベット仏教の転世思想ので、形滅しても魂不滅の魂観が最も重要であると考えられる。

## おわりに

本論ではチベット仏教の霊塔関する先行研究を各視点から収集し、整理および検討した。これらに基づいて、インドストゥーパからチベット原始土葬の塔型、そしてチベット仏教的な霊塔形成と発展について検討した。その後、8世紀中から13世紀中までに、チベット地域で建立されたチベット仏教的ないくつかの霊塔論述した。最後に、現在も建立されているチベット仏教の霊塔を分類し、仏塔は必ずしも霊塔ではない、霊塔と原始の墓、仏塔は全てチョルテンの種類であることが分かった。

続いて今後の展望としていくつかの問題点もある。

チベット仏教の肉体制度及び霊塔の形成は、古代インド塔葬制度と中国仏教の「肉体制」の影響だけでなく、古代エジプト文明の影響も受けているかもしれない。なぜなら、古代エジプトはチベットのマルドン或いは肉身霊塔と非常に似ている「ミイラ」の製作技術を持っているからである。チベットと古代エジプトはこの方面の交流があったかどうか、まだ資料が不足ため、言いにくいである。

筆者はチベット仏教の「肉身霊塔」葬俗は古代インド仏教の魂観に由来し、古代インド仏教は中国とチベット地域だけでなく、遠くアフリカの古代エジプトにも影響を及ぼしたと考えている。これについて、任继愈(1983:559)『宗教词典』の中に「仏教を古代インド各地と隣接国に伝え、さらにシリア、エジプト、ギリシャなどに使者を派遣して仏教を広めた」とある。また、羽溪了諦(1999:35)『西域之佛教』及び弘学(1997:1)『藏传佛教』、辛光武(2002:19-20)『热贡艺术』などにもインドストゥーパを各地に伝わったことにおいて解釈がある。

これらの観点はチベット仏教の肉体霊塔と古代エジプトのミイラの比較研究に有益な啓発を与えてくれる。古代エジプトからインド、それからチベット仏教文化の交流にはある種の自然なつながりがあるようである。もちろん、これはただ筆者の推測であり、さらなる分析と考古学研究が必要である。

29) この舍利霊塔は仏舍利と違う。

## 参考文献

### チベット語

- sba gsal snang (2009) 『sba bzhed』(巴协) 民族出版社  
五世达赖喇嘛 (1981) 『西藏王臣记』 民族出版社  
dung dkar blo bzang'phrin las (2009) 『dung dkar tshig mdzod chen mo』 中国藏学出版社  
第司·桑吉嘉措 (1990) 『南瞻部洲唯一庄严目录』 西藏人民出版社  
韦色朗 (2010) 『韦协』 西藏古籍出版社  
根秋登子、次勒降泽 (2007) 『藏式佛塔』(藏汉对照) 民族出版社  
五世达赖喇嘛 (著) 刘立千 (訳) (2002) 『西藏王臣记』 民族出版社  
夏格旺堆 (2008) 「西藏古代建筑佛塔历史沿革的初步研究」 西藏大学

### 中国語

- 罗桑伦巴 (著) 徐进夫 (訳) (1980) 『第三眼』『天华瓔珞丛书』 天華出版事業、天华出版公司  
张驭寰 (2006) 『中国佛塔史』 科学出版社  
羅哲文 (1985) 『中国古塔』 中国青年出版社  
全佛编辑部编 (2003) 『佛教小百科 (24) — 佛教的塔婆』 中国社会科学出版社  
桑子长編 (2001) 『中国名塔』 重庆出版社  
索南才让 (2003) 「论西藏佛塔的起源及其结构和类型」『西藏研究』  
华瑞·索南才让 (2002) 『中国佛塔』 青海人民出版社  
欧信福 (1993) 「西藏佛塔及其建筑艺术」『西藏艺术研究』  
刘畅 (2012) 「西藏佛塔研究」南京工業大学  
冯智 (1988) 『雪域丧葬面面观』 青海人民出版社  
霍巍 (1995) 『西藏古代墓葬制度史』 四川人民出版社  
索南才让 (2003) 「藏民族的灵魂观与藏传佛教肉身灵塔」『青海民族学院学报』(社会科学版)  
夏吾卡先 (2021) 「吐蕃塔形墓的起源与原始塔葬」『西藏大学学报』(社会科学版)  
平措次旦 (1985) 「布达拉宫内的五世达赖灵塔」『文物』  
劉水玉 (1994) 「十世班禅灵塔祀殿建造始末」『經濟世界』  
陈庆英 (1989) 「四至九世班禅大师以及他们的灵塔」『青海社会科学』  
旺堆 (1990) 「五世至九世班禅合葬灵塔」『西藏研究』  
洛桑群觉、陈波 (1997) 「西藏的灵塔与金顶」『西藏研究』  
霍巍 (1989) 「西藏灵塔与肉身之制初探」『西藏研究』  
河口慧海 (1904) 『西藏旅行記』(下卷) 博文館、第八十七章  
达瓦拉措 (2020) 『五世达赖喇嘛灵塔研究』(博士論文)、西南民族大学  
(1925) 『佛說八大靈塔名号經』『大正新脩大藏經』 大藏出版株式会社、第32冊、経号1685  
丹珠昂奔 (2013) 『藏族文化发展史』(上) 中央民族大学出版社  
陈光荣 (2003) 「西藏寺庙里的金灵塔」『西藏民族学院学报』  
当智 (2020) 『チホルテン信仰と文化交渉—チベットアマド地域を中心として』(博士論文) 関西大学東アジア文化研究科  
任继愈 (1983) 『宗教词典』 上海辞書出版社  
羽溪了諦 (著) 贺昌群 (訳) (1999) 『西域之佛教』 北京商務印書館  
弘学 (1997) 『藏传佛教』 四川人民出版社  
辛光武 (2002) 『热贡艺术』 青海人民出版社

